

連載 土木技術者評伝

嘉南大圳設計者 八田與一技師 (6)

—台湾で愛され日本人に知られていない偉大な土木技術者—

川 本 正 之

- | | |
|---|-----------------------------------|
| (1) 姿を現した銅像 | (9) 撃沈—いつ死んでもお国のためなら本望じゃないか— |
| (2) この人の事を知ってほしい | (10) 陽光浴びる銅像—大変な恩恵をもたらした技術に国境はない— |
| (3) 胸に抱く大計画 | (11) 追悼式典(墓前祭)に参加して |
| (4) 家族とともに | (12) 民族を超えた土木技師 |
| (5) 前例なき工法 | (13) 農民たちの歓喜の声 |
| (6) 二つの試練 | (14) 命日には墓前祭が |
| (7) 不毛から肥沃へ—10年の月日を費やして嘉南大圳が完成— | (15) 水を引いた神の話 |
| (8) 李登輝氏は語る—米とサトウキビの増産で稼いだ外貨「八田さんの本当に大きな貢献は3年輪作だと思う」— | (16) フォルモサ(美麗)の島、台湾 |
| | (17) 台湾万葉集より |

(本文中敬称略)

(13) 農民たちの歓喜の声

十年の歳月と、今なら五千億円とも言われる経費をつぎ込んで昭和5年(1930)完成したこの巨大な灌漑施設は「嘉南大圳」と命名された。「大」はとてつもなく大きい。「圳」は日本の字にはないが水路の意味。

珊瑚潭の水が、蜘蛛の巣のように張り巡らされた水路を通して、15万haの嘉南平野に注ぎ込まれた結果、洪水・干ばつ・塩害の三重苦に苦しみ、飲み水にも事欠いた嘉南の農民たちは歓喜の声を上げた。大地は、それから僅か3年で肥沃な緑野に姿を変えて台湾最大の穀倉地帯となり、嘉南の農民の生活を一変させた。八田與一の

名前は嘉南60万の農民の心に刻み込まれ「嘉南大圳の父」と呼ばれるようになる。

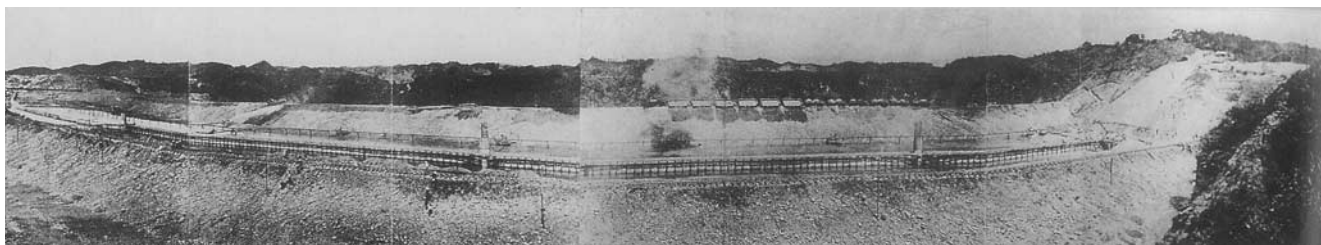
34歳の若さで、この巨大工事に挑戦した八田與一は、明治19年(1886)金沢で生まれた。第四高等学校で西田幾多郎に学び、東京帝国大学土木工学科で広井勇の教えを受けた。当時の優秀な人材の多くが持っていた、損得抜きで国家のために働こうとする気概を、與一も持っていたに違いない。

與一は独創の人であった。そのスケールの大きさ、発想のユニークさ故に「大風呂敷の八田」というあだ名を頂戴していたが、この灌漑工事でもその独創性を遺憾なく発揮し、誰も考えなかった手法を多く採用した。

その一つは、セミハイドロリックフィル工法(中心にコンクリートを建て、積み上げた粘土と土砂に水をかけて固め堰堤を造る)による世界最大のダム構築である。また、大型土木機械を導入して(日本で初の重機械による施工)工期の短縮を図った。さらに「良い仕事は安心して働ける環境から生まれる」と、工事現場に職員用家

(下記の一部、写真および文章を引用・転載しました)

- 産経新聞「凛として」取材班:「凛として 日本人の生き方」,産経新聞(2005)
- 古川勝三:台湾を愛した日本人
- 司馬遼太郎:街道をゆく 台湾紀行
- 緒方英樹:「フォルモサの大地に残したものは」,日刊建設工業新聞
- 「新しい歴史教科書」,扶桑社
- 李登輝:「日本人の精神」,大学祭「三田祭」での講演予定原稿



写真—18 ダムの堰堤工事 地震でダムが壊れないように考案されたセミハイドロリックフィル工法で、1273 mにおよび、世界に例をみない規模の堰堤工事が行われた。写真提供 古川勝三

族宿舍や病院，学校を建て，娯楽施設，商店，駅までつくった。

なかでも最も独創的と言えるのは，三年輪作給水法の実施である。いくら巨大なダムとは言え，珊瑚潭の1億5千万トンと濁水溪の水だけでは，5万haの土地にしか給水できない。すべての農民に平等に水を与え米づくりができるように，與一は給水区画を三つに分け，①米，②サトウキビ，③野菜の3種を，三年ごとに順次作るシステムを構築し，灌漑面積を3倍の15万ha（おおよそ香川県の面積）にまで広げたのである。農民の立場に立って考えられたシステムであり，76年経った今日も続いている（台南も工場の進出が著しく，農地は減少しつつあるようだ）。

(14) 命日には墓前祭が

嘉南大圳の工事は，多くの犠牲者がでた。病気（マラリアなど）で亡くなった人も含めると134人の死者の数になった。與一は殉工碑に次のように追悼文を記している。

「嘉南大圳は其の利澤を蒙る広袤の宏いなると其の水源に於ける工式の雄なるとに於いて世界に冠たり，従って其の工細且微にして施工上幾多の困難に逢著せるも辛楚十年茲に工全く成る。諸子は斯る間に於いて不慮の災厄に遭い或いは風土の病疫に冒され空しく異郷の墳塋に眠る轉た痛惜に堪へしざるなり，雖然諸子は齊しく犠牲的殉工者にして，一死克く従業員の士気を鼓舞し，以って此大工を竣ふるを得たり，又偉なりと謂ふべし。噫々彼の滄々たる曾文溪水は此蜿蜒たる長堤に蘊崇して長へに汪々たる碧潭を奉し，隨時の灌水は滾々還流して盡きざる限り諸子の名も亦不朽なるべし。乃ち茲に地をトシ碑を建て以て諸子に傳ふ此の文となす矣。」

昭和五年三月

烏山頭交友会長 八田與一

そして碑には，亡くなった者の名前を，日本人，台湾人の区別なく死亡順に刻んだ。

八田技師とともに工事に携わっていた人びとは，作業服姿で大地に腰を下ろした八田技師の銅像を作り，起工地点に据えてその功績を称えた。

昭和17年（1942）5月8日，フィリピンの綿花作付け灌漑調査を，軍より命ぜられた與一は，大洋丸で五島列島の南を航行中，米国潜水艦によって撃沈される。56歳だった。

その3年後の敗戦の年，妻外代樹もまた，與一の造ったダムの取水放水路に身を躍らせて44歳の生涯を閉じた。日本人が去り，日本人の銅像や墓が次々と壊されて



写真一 19 八田與一の地元，金沢からの代表中川外司氏（台湾と友好の会事務局長）筆者撮影

いくなか，二つの死を悲しんだ嘉南の人びとは，せめて二人の魂が烏山頭の地で安らかに眠ることを願い，銅像の後ろに墓を建てた。以来毎年，與一の命日には，一度も欠かすことなく墓前祭が行われている。そこには與一に感謝し，恩ある人を決して忘れない嘉南の人びとの姿があった。

司馬遼太郎の『台湾紀行』は，台湾を私たちに引き寄せただけでなく，ある土木技術者の名と業績を広めた。菊池寛が，戦前宮本武之輔（八田與一の後輩で広井勇の門弟，信濃川大河津分水路に貢献）について人物論を書き，作家による技術者の人物論はきわめて稀と言われたが，また司馬遼太郎による人物論も土木の人としては稀有な例であろう。台湾の嘉南に烏山頭ダムを建設し，不毛の大地を台湾最大の穀倉地帯として蘇らせた八田與一技師のことである。

(15) 水を引いた神の話

首都・台北から国内線で高雄に飛んでおよそ1時間。台南市から車で1時間ほどの静かな山あいに烏山頭水庫はある。もっと山奥にあると想像していたが，高速道路からダムを見ることができた。水が山ひだを縫うように入り込んで，複雑な形をした人造湖，その輪郭から「珊瑚潭」とも呼ばれる。

先にも記したが，八田與一が「嘉南大圳の父」と現地で慕われる由縁は，嘉南平野15万haに張り巡らされた水路にある。その1万6千kmという給排水路の長さは地球半周に近い。あまねく通水され，みるみる大地を潤すさまに，農民たちは「神の与え賜うた水」と歓喜したという。

当時，東洋一の灌漑土木工事は，洪水，干ばつ，塩害という三重苦を救った。昭和5年（1930）のことである。

大正9年（1920）に起工し，10年の歳月を要した東洋空前の大工事は，『嘉南大圳新設事業概要』（昭和5年発

行)によると「財を費やすこと五千有余萬」とある。現在なら「萬」を「億」と言い換える位の額でもあろう。関東大震災や金融恐慌を挟んでの捻出である。さらに工事竣工後も「合理的農業の振興を期し、地方の福祉國富の増進を図る」地道な指導によって、嘉南 60 万の人々は経済的に自立し、教育にも力を注ぐようになった。その延長上で現在、台湾総統陳水扁氏など多くの人材を生み出している（烏山頭の近くに陳氏の生家はある）。

(16) フォルモサ（美麗）の島、台湾

今から 100 年少し前、かなりの日本人がフォルモサ・麗しき島と呼ばれていた台湾に渡った。中国から割譲された台湾は、清国から「化外の地」とまで言われていた。化外とは主の居ない未開国に近い。その台湾が歴史的に知られてくるのは、16 世紀後期に日本船の渡航が始まり、1593 年（文禄 2 年）豊臣秀吉は高山国あての文章を送って服属を計った。

17 世紀初め、オランダ人が南部にゼーランディア城な



写真一 20 追悼式典（墓前祭）に集まって来た地元の人たち。膝まづく人もいる。筆者撮影

どを築いて支配し、日本人の貿易を取締まって浜田彌兵衛事件が起こった。1672 年（寛文 12 年）鄭成功がオランダ人を追ったが、1683 年（元和 3 年）鄭氏が清朝に降伏して以後中国の支配が確立した。

1874 年（明治 7 年）日本は征台の役を起こし、1895 年（明治 28 年）日清戦争の結果日本領となり、台湾総督府が置かれた。第二次大戦後中国に復帰したが、1949 年（昭和 24 年）以来蒋介石の中国国民党政権が根拠していた。この日本の敗戦までの 50 年間に日本時代として過ごした。この 50 年間に日本がフォルモサの大地に残した足跡とはどのようなものであったのか。

(17) 台湾万葉集より

台湾映画『非情城市』の脚本を手がけた呉念眞の初監督作品『多桑』は、日本統治下を生き自分の父親をモデルに作ったという。多桑（父さん）世代と言われる人たちは、日本の精神や文化を頑なに慕い、子供たちに頑なに「父さん」と呼ばせる人もいた。日本同化政策による教育は否めない。しかし、その頃を知らない子供たちは反問する。「父さん、なぜそんなに日本が好きなのですか？」

そして、『台湾万葉集』を編んだ著者は、〈日本語のすでに滅びし国に住み短歌詠み継げる人や幾人〉と詠んで逝った。多桑世代にとって、「心の祖国」とまで憧憬させた日本像を身をもって示したのは、例えば李登輝が新渡戸稲造に見た真の“武士道精神”を持った人たちであったのだろう。そしてその心を、八田與一をはじめとする土木の仕事をした人たちは持っていたのだと思う。だからこそ多くの多桑たちは今の日本、日本人を嘆いている。

日本時代を共に精一杯生きた日本人がいたことを誇りに思ってほしい、その精神を思い出して毅然と生きてほしい。2002 年（平成 14 年）11 月 24 日、日本の大学祭で予定され、幻の講演となった李登輝前総統の「日本人の精神」は、八田與一技師が示した日本精神をもう一度思い出してほしい、日本が危機の時代を乗り切る指針にしてほしいという切なるメッセージであった。

（以下、次号）

2006 年 5 月 27 日 記

JCMA

【筆者紹介】

川本 正之（かわもと まさゆき）
社団法人日本機械土工協会
技術委員長